

と考えられる。

(38) 香南市教育委員会蔵「岡本彌太宛書簡」では確認することができなかった。

(39) 明治25年5月27日生、昭和4年3月4日没。大正6年に島村抱月が主宰していた第一次芸術座を辞し、新富座にて新国劇の旗揚げ公演を行う。「月形半平太」や「国定忠治」等の剣劇、「白野弁十郎」「大菩薩峠」等の演劇により大衆的人気を博した。

(40) 『演劇百科大辞典』（昭和61年5月、平凡社）に拠れば、「白野辨十郎」の日本の初演は、大正15年11月に邦楽座で上演された額田六福翻案／澤田正二郎主演のもの。菊池寛は「澤田正二郎君の死」（『読売新聞』（昭和4年3月6日）にて、「最近やつたもので」「白野辨十郎」を上演した時などは実によく芝居を解した人だと思つた。あれだけのことは外の人には出来ないのではないかと思ふ。（中略）実に明治からいろいろ／＼新劇運動もあつたが、はつきした結晶があり、劇団で堂々とした存在は新国劇だけではないか。それ丈に澤田君の死は惜しく、感は深い」と述べている。

(41) 『読売新聞』（大正10年12月22日）の「抱月氏追善劇」の記事には、明治座にて予定されている抱月没後三周年興行において、読売新聞社が後援となり、ドストエフスキー原作／坪内士行脚色「罪と罰」四幕等が澤田正二郎一座によつて上演される予定となつてゐることが書かれており、「大菩薩峠」の出色ある演出」によつて好劇家の評価を得た澤田正二郎が、「今度は「罪と罰」の大学生ラスコリニコフに扮して彼独特の持ち味を出さうといふ計画」とある。

(42) 関西から戻つた澤田正二郎一座は、昭和3年8月1日から帝国劇場にて真山青果原作の「坂本龍馬」四幕四場を上演し、盛況を博した。その後、同年10月31日から同演目を四幕五場に拡大して公園劇場にて上演している。

(43) 中村吉蔵「新国劇の十周年（一）」（『読売新聞』昭和2年7月13日）は、「澤田正二郎君が十箇年（稿者注：澤田正二郎による新国劇が昭和2年7月で十周年）の長きに亘つて、よく新国劇を支持して来たばかりでなく、今やそれが現代の日本の劇壇に於て歌舞伎劇の一敵国としての堅牢な地盤を造るに至つたの事実」に当面して、驚嘆せずにはゐられない筈だと思ふ」と評している。

(44) Mary Pickford、1892（明治25）年4月8日生、1979（昭和54）年5月29日没。

(45) 澤田正二郎「若き日の思ひ出」（『苦闘の跡 改訂版』（昭和3年12月、柳蛙書房））では、「父は土州山の内藩の豪士で、彼の後藤象次郎を崇敬してゐた土佐兒であつた。而も、明治十年の役の熊本龍城の際には、目ざましい奮戦をして大いに勲功をさへ博したといふ、譽ある日本武士の一人であつた。」と土佐藩出身者であつた父のことを回顧している。

【付記】

・本研究はJSPS科研費 J20K12943の助成を受けた研究成果の一部である。
・翻刻にあたり、故猪野睦氏、同じ遺族、藤田泰子氏、岡本龍太氏には資料のご提供をいただき、其の他多くの方々からご助言を賜つたことに改めて感謝の意を表したい。

及している。なお、「芭蕉私見」が掲載された「コギト」には「芭蕉特輯」が組まれており、同年5月には『大芭蕉全集』（大芭蕉全集刊行会）が刊行されている。

(24) 芥川龍之介「芭蕉雜記」〔梅・馬・鶯〕（大正15年12月、新潮社）

(25) 「芥川龍之介追悼号」の「文藝春秋」（前掲）に掲載された「十本の針（遺稿）」の「三 鴉と孔雀と」。

(26) 「芭蕉雜記」（前掲）「四 詩人」にて、「ゲエテは詩作をしてゐる時にはDaemonに憑かれてゐると云つた。芭蕉も亦世捨人になるには余りに詩魔の翻弄を蒙つてゐたのではないであらうか？ つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かつたのではないであらうか？」と芥川は述べている。こうした「詩魔の翻弄」に対して、近代人としての理性が勝つてしまつたがゆえに、芥川を「酔へない芭蕉であつた」と彌太は評したと考えられる。

(27) 『大芭蕉全集 第二巻 俳句篇下』（前掲）の「芭蕉句選拾遺註釈」は、同句の前書に「佐夜の中山にて」とあることから、『新古今和歌集』の西行の「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」を踏まえ、「命を長らへたため又ここを越えられるのだといふのであるが、句は今この佐夜の中山で足を留めて暫時風に吹かれる、この小さいわづかの笠をかざして、その下の陰で涼む今なほそれを心頼みにして休むといふ意である」と注を付している。

(28) 寺田寅彦のことを指す。物理学者であつた寅彦にちなんで、物理学 (physics) から「P」としたか。

(29) 高知県高知市小津町の寺田寅彦邸跡（現・寺田寅彦記念館）を指す。

(30) 寺田寅彦は、「藤田太郎個人展覧会」（昭和10年7月、初出未見、『寺田寅彦全集 第十六巻』（平成10年3月、岩波書店）にて、「藤田君の絵は強烈な色彩を駆使しながら少しも軽浮の相を現わさない、むしろ一種重厚にして沈思的な気持を漂わせているような気がする。」と評している。

(31) 昭和9年の国画会展第九回展を指す。同展に藤田太郎は「秋庭」を出品している。それを伝え聞いて国画会展に向いた寅彦は、藤田宛書簡（昭和9年5月5日、『寺田寅彦全集 第三十巻』（平成11年8月、岩波書店）にて、「今度貴下の「秋庭」によつて始めて紅葉時の我家の庭を見ることが出来て実に嬉しく感じました。」と書いて送っている。

(32) 吉村冬彦（寺田寅彦）「庭の追憶」（「心境」（昭和9年6月））。

(33) 「庭の追憶」（前掲）には、「去年の若葉が今年の若葉に甦るやうに一人の人間の過去はその人の追憶の中にはいつ迄も昔のまゝに甦つて来るのである。しかし自分が死ねば自分の過去も死ぬと同時に全世界の若葉も紅葉も、もう自分には帰つて来ない。それでもまだ暫くの間は生き残つた肉親の人々の追憶の中にかすかな残像のやうになつて明滅するかもしれない。」とある。藤田太郎「秋庭」をきっかけとして、旧邸の庭園を追懐し、生前の妻や父母等の姿に思いを馳せた寅彦を「精神の幻像に仕へる芸術家」と彌太は評している。

(34) 寅彦の藤田太郎宛書簡（昭和9年6月22日、『寺田寅彦全集 第三十巻』（前掲）を確認すると、「秋庭」の絵を御恵与下さるとの事で、余り難有過ぎて相済まないやうな気が致しますが折角の御好意を背くのも亦済まない次第だと思ひますので難有拝受致し永く鑑賞致したいと存じます」とあり、「秋庭」が寅彦に贈呈されたことが分かる。その後、「秋庭」は焼失したが、同庭園の春の景観を描いた「春庭」が寺田寅彦記念館に収められている。

(35) 小島貞一（明治21年3月26日〜昭和17年10月10日）は、室生犀星の異母兄の長男であり、「日本詩人」等の詩誌に投稿しながら詩作を続けていた詩人。生前刊行された詩集には私家版『初餐四十四』（昭和7年4月）がある。

(36) 芥川龍之介「未翁南甫句集」の序（「梅・馬・鶯」（前掲））には、「しかし昨十三年の首夏、室生君を尋ねかたがた始めて金沢に一週間を送り、御両氏（稿者注・『未翁南甫句集』の著者である桂井健之助、太田敬太郎）にも何かと御世話になつたことはわたしの一生の追憶のうちでも最も愉快なものの一つになつて居ります。あの時わたしは御両氏の外にも室生君や小島貞一君と何とか言ふお茶屋へ行き「草餅」や「蝸牛」の句を作りました。」とある。

(37) 小島貞一「初餐四十四」（前掲）は、「半生」、「生活」、「専光寺海辺」、「霜風」、「青い龍」、「寒雀」の章立てで九十篇の詩篇が収められており、萩原朔太郎が序を、室生犀星が跋を寄せている。序において、「小島君の詩境には、どこか茶道や俳句の精神と通ずるものを感じさせる。それは閑寂の中にも風雅を楽しみ、人生の物化しさを嘆つやうな、東洋的静観の或る心境である。」と朔太郎は評している。なお、国立国会図書館蔵の同詩集の奥付は「昭和七年四月五日発行」となっているため、彌太が「昭和六年の十二月」としたのは誤り

には「火をとる蝶」、「白露」、「闇をよぶもの」、「墓」、「金鈴子^{すずむし}」、「送り火」の六篇が共に見開きで掲載されている。他誌にも「琴歌」は掲載されており、安部宙之介が詩・研究発行所から刊行していた詩誌「詩・研究」第三冊（奥付が無いため、記載内容から昭和11年刊行と推定）にも「琴歌四種——感想にかへて——」として、「うすぶとん」、「ふゆの月」、「火の車」、「東野」の四篇が掲載されている。

また、彌太没後に『琴歌抄』（昭和18年4月、高知官報販売所）を編纂した住江明は、同書掲載の「琴歌について」にて「彌太氏の詩人としての素直さが、如実に表現されてゐるといふも、決して過言ではないと思ふ」と評している。

(12) 昭和8年に大日本雄辯會講談社レコード部専属の歌手としてのデビュー。昭和9年の「赤城の子守歌」、「国境の町」により流行歌手としての地位を確立した。

(13) 羊士諤の七言絶句「郡中則事」。『新釈漢文大系 全唐詩』（昭和39年4月、明治書院）の通釈には、「蓮の花の紅の衣はすっかり散って、ただほのかな香りがどこかに残っている。葉の上の白露は、秋の明るい光につめたくきらめく。越の妓は、限りなくもの思いがふかいから、この上、舞の長そでを、欄干にもたれさせぬがよい。うらぶれた蓮のさまをながめていると、いつそういろいろな愁いを思い出そうから。」とある。

(14) 『徒然草』五十八段。

(15) 当時、堀口大學や淀野隆三らによる翻訳が流通していたシャルル・リュイ・フィリップを指すと考えられる。

(16) 「日本詩壇」にも参加し、宮澤賢治に関する研究を行っていた詩人の小田邦雄と考えられる。なお、後年、小田は『宮澤賢治覚え書』（昭和18年11月、弘学社）を刊行している。

(17) 挿絵を担当している藤田太郎宅を指すと考えられる。なお、「コタン雀」の挿絵には、ここで話題となっている胡桃細工のコタン雀の姿が描かれている。

(18) 芥川龍之介「東北・北海道・新潟」は、「改造」（昭和2年8月）に「日本周遊」という見出しでまとめられた十四本の旅行記のうちのひとつ。宮坂覺編「芥川龍之介全集総索引付年譜」（平成5年12月、岩波書店）に拠れば、「改造社の東北・北海道方面の『現代日本文学全集』宣伝講演旅行」とある。引用されている詩篇は「羽越線の汽車中——「改造社の宣伝班と別る。……」」に

付されている。

(19) 「文藝春秋」「芥川龍之介追悼号」（昭和2年9月）掲載の小穴隆一「わたりがは」を指す。

(20) 芥川龍之介訳「パステルの龍」（『點心』（大正11年5月、金星堂）所収の「月光——Judith Gautier——」と「陶器の亭——同上——」を指す。「隨筆 楚歌春秋」では「日光」となっているが、「月光」の誤植と考えられる。

(21) 「隨筆 楚歌春秋」と同年に上梓された室生犀星『慈眼山隨筆』（昭和10年2月、竹村書房）所収の「芥川龍之介と詩」には、「山吹」の詩篇に関する芥川との思い出話が残されている。「僕はこの詩の旅び^よといふ言葉や、山吹の枝を笠にさす心持が永い間頭にのこつて、ふと口ずさんで見て哀しみを感じるものがあつた。詩としても非常にうまい。芥川君の生涯に二つとない秀れた作であらう。」という記述を確認することができる。

(22) 『大芭蕉全集 第二巻 俳句篇下』（昭和10年7月、大芭蕉全集刊行会）の「芭蕉句選拾遺註釈」は、「この山吹に昔太田道灌が狩倉の途中、雨に会つて、ある民家へ立寄つて雨具を得んとした時、少女が無言で、山吹の枝を差出した。それは和歌にこと寄せて、雨具の無いといふ断りであつたといひ伝へられてゐる。それに思ひ寄せて、少女は雨具の代りに山吹を出した。それは蓑が無いとの意味であつたが、こゝではそれを転じて笠として、山吹の花の枝、それは笠にさされる枝の形と洒落ていたのであらう」と注を付している。

(23) 「隨筆 楚歌春秋」と同年に掲載された萩原朔太郎「芭蕉私見」（『コギト』（昭和10年11月））は、「山吹や」の句を「芥川君の愛誦して居た句であり、同君の詩の一行にも歌はれて居る」と紹介し、「仄かに漂泊とした旅愁のあはれさを感じさせる佳句」と述べている。また、「新古今の幽玄体から学」んだ「真の本質的のリリックを持つ」、「一層純一な抒情詩人」と芭蕉を評価し、洋の東西は問わず「抒情詩の尽きるテーマは同じ」であることから、ニーチェと同じく「魂の家郷」を持たない「永遠の漂泊者」として芭蕉を位置付けている。この点に関して、宮崎真素美「萩原朔太郎「漂泊者の歌」と〈久遠〉——〈母〉から〈幻影の人〉へ——」（『国語と国文学』（令和2年10月））は、「家郷」をめぐる時空間を構成的に配置している」「『漂泊者の歌』の〈漂泊者〉（汝）には、ニーチェばかりか芭蕉の相貌までも投影することが可能となる」と言

【注】

(1) 明治32年1月23日生、昭和17年12月2日没。高知市立商業高等学校を卒業後（大正7年）、神戸の貿易会社鈴木商店に就職し、高知に駐屯していた歩兵第四十四連隊に一年志願兵として入営し、満期除隊後は鈴木商店を辞した。帰郷後、川北電気企業株式会社高知出張所（大正10年）に務め、尋常高等小学校の教員（大正12年）を務めながら本格的な詩作活動を開始した。同郷の詩人池上治水らと詩誌「ゴルゴダ」（大正12年）を創刊し、「麗詩仙」（大正15年）や「青騎兵」（昭和3年）等の同人誌で詩作を続ける。「日本詩人」（大正13年6月）「新詩人号」には、正木彌太の名で「最後の蒼穹」が掲載され、昭和5年より詩誌「詩神」にも投稿している。昭和8年4月の「日本詩壇」創刊後は、同誌を中心に詩人としての活動を行った。彌太の年譜に関しては、『岡本彌太詩集——山河篇——』（平成10年1月、泰樹社）所収の「岡本彌太年譜」を参照されたい。

(2) 鈴木健司「詩集『春と修羅』の同時代的受容 土佐の詩人・岡本弥太の宮沢賢治理解」（『宮沢賢治という現象——読みと受容への試論』（平成14年5月、蒼丘書林）に詳しい。なお、稿者が岡本彌太遺族から確認した彌太旧蔵の「住所録」には、草野心平や「イーハトーヴォ」を編集発行していた菊地暁輝の名は確認することができた。また、「日本詩壇」（昭和9年3月）においても、「たとへば故宮澤賢治などの持った位置が、どのようなものであつたかと省察してみれば位の豊かな内省が今欲しくあります。宗教とか哲学とかの問題になると、まるきり見知らない詩人といふものがあつてよいものかどうか——」（「明日の詩歌」と彌太は語っている。

(3) 岡山県の詩人間野捷魯は、彌太が詩集『瀧』（昭和7年10月、詩原始社）を出版した際に版元となった詩原始社というリトル・プレスを主宰しており、公私共に付き合いが深かった。

(4) 「楚歌春秋」というタイトルで彌太は二度連載を持っている。一度目は今回対象とした「高知新聞」に連載された「随想 楚歌春秋」、二度目は詩誌「詩道」（昭和12年3月、同年7月）に掲載された「楚歌春秋——わが詩生活の譜——」である。後者は自伝的性格が強く、詩作との出会いから現在に至るまでの詩的履歴を記している。

(5) 藤田太郎は、彌太と同郷の画家であり、昭和10年の国画会展第一〇回展に「ホウボウ」を出品し、入選している。その後、国画会会員となる。また、彌太の第一詩集『瀧』の装丁や高知県出身の小説家大原富枝の『祝出征』（昭和18年7月、新民書房）の装丁等も手掛けた。富枝は、「四国山脈の秋」（『息にわがする』（平成2年7月、朝日新聞社）、初出「旅と宿」（昭和49年10月）にて、「秋山を好んで描いた私の初めての本の装幀をしてくれた絵描きさんも、もうずっと前に亡くなった。」と藤田のことを回顧している。

(6) 平成11年12月18日から平成12年2月13日の期間で高知県立文学館にて開催された「岡本弥太生誕百年記念展——新世紀の詩人たちへ——」図録（平成11年12月、高知県立文学館）にも掲載されている。

(7) 国立国会図書館をはじめ、高知県立文学館、高知県立図書館、高知市民図書館、高知新聞社等にも収蔵されていない。なお、昭和20年7月4日の高知市大空襲によって高知新聞社の「社屋で焼け残ったのは倉庫だけであつた」（『高知新聞一〇〇年史』平成16年12月、高知新聞社）という状態となったため、当時の紙面を閲覧することが困難な状況にある。

(8) 「被征服者」／「被征服民族」たちの声——岡本彌太・未刊詩集『山河』の可能性」（千葉大学教育学部研究紀要）令和5年3月）にて問題とした。

(9) 注（8）に同じ。

(10) 安政年間に成立したとされている作詞・作曲者未詳の端唄、歌沢、小唄の「秋の夜」の詞。恋しい人を待つ女性の心情を秋の美しい月に寄せた内容。

(11) 岡本彌太「わが琴歌」（『日本詩壇』昭和11年10月）に拠れば、「自分の詩に、二つの鏡を持つ」として、自らの「表だつた詩」とは異なる「二面の鏡の影の方にあつた自分の幽かな姿」を表すものが「琴歌」である。また、「隠微なところに月光を帯びて不動にたゝへてゐる心の郷愁」を「うた」として歌ったものが「琴歌」であり、「自分の詩といふもので自分の口吟み思ひを和げるのは、この種の古めかしいうたのみ」と述べている。

なお、「日本詩壇」（昭和10年11月）には、「琴歌四種」と題して、「秋夕夢」、「青鴨」、「にはか法師」、「淡暮」が掲載されている。同誌には他にも彌太の「琴歌」が掲載されており、「琴歌抄」（昭和11年10月）には「桔梗」、「清怨」、「朝かがみ」、「晩鴨」、「雪に寄す」、「千鳥」の六篇、「琴歌抄」（昭和16年12月）

ら面白い。よほど幼馴染の仲であらふ。萩原朔太郎は「小島君の如きは當代の高士であり何よりもその生活と心境の超越に畏敬を感じひきつけられる」と書いてある。僕はこれを書き乍ら自らへもある方面からの高士禍のあつたことにひどい恐縮を感じ乍ら、小島さんも高士といはれて格別うれしくはないだらふと思つた。兎角いつか山中温泉からかの繪葉書便りをみると、悠々自適の生活にあるらしいので羨ましい。句も玄人である。次はその詩中の一詩である。

―初秋―

襖障子

しろじろと張りかへ

たたみの波もま青に

こころあらたに

初秋はきつれど

妻のみ古く住みのこり――。

(十四)「澤田正二郎の追憶」掲載：昭和10年10～11月(推定)

【本文】

三十八歳の若さで亡くなつた人としては近代では澤田正二郎程、對世間的な魅惑を與へた人も寡からふと思ふ。舞臺演出といふものが過渡期日本の大衆層を對手として興行されてあるものである限り、月形半平太、國定忠治とか大菩薩峠とか云ふもの以外にこの人の眞價は余り解されてゐない様であるが、演ればどの様な新らしいものでも演れる才能と力を持つてゐたのが澤田といふ俳優であつたと思ふ。その一つとして成功したものに大衆向きではあるがシラノベルジュラックの翻案白野辨十郎がある。

新作脚本の上演は殆どこの人の新國劇を通じてのみその脚光を浴びる可能性があつたのである。菊池寛氏は澤田の藝の主調は感傷的英雄主義であつた、とその死の當時書いてゐるが、須磨子の藝術座にゐた時の藝術至上の氣魄が、／＼大衆的なものを上演する際自から一つの英雄主義的な好みを選ばせたのではないかと思ふ。

大正七八年頃、澤田が東京明治座興行などの失敗から關西で悪戦苦闘してゐる際、私は再三彼の眞摯な藝に接した。歐洲戦後のゴルドラツシュに酔つた人波の中で彼の演出する國定忠治とか月形半平太とかの英雄趣味は忽ち人氣に投じて殊に神戸

の中央劇場などでは月越しでうち續けたことを記憶してゐる。「大統領」などの大向ふの懸聲はこの時生れた。

その間にも澤田といふ人はドストエフスキーの「罪と罰」の上演を忘れぬ人で、彼のラスコリニコフが老婆殺しの後の大袈裟且深刻な自責の身震ひや表情や、彼のよき對役故人中井哲の裁判官の名科白が今もみるやうである。然し神戸では今だこの人の新劇などには理解がなくて殺陣物が狂喜して迎へ／＼られた。一つはさうした時代の中にあつたのである。この傾向を見てとつた澤田の上演脚目は月形半平太になり國定忠治になつたのである堂々たる體格、容貌と極りのつく科白は忽ち民衆に澤田といふ英雄をこさへて仕舞つた。當人は幾分苦々しいことでもあつたであらふか。

澤田は柔劍道何段だとか稽古つけの時も負傷の續出だとか芝居やら眞劍試合やら判らぬ噂も愛嬌だつた。尤もある殺陣で二三子が指を縋帶してゐるのは聊か滑稽であつた。澤田と言ふ人はそれほど剛氣なところもあつて座員など澤田先生と呼んでゐるのでも知られた。然し澤田と云ふ人間はこんな殺陣の時でも不思議な劇以上の持味をもつて迫つて來るものがあつた。「坂本龍馬を帝劇でみてゐるうちに不思議な力が彼の體から發散してゐるのに氣がついた。それはうまいとか、巧みだとか云ふやうな演技の味ではない。妖氣とで／＼もいふのか、神氣とでもいふのか、一種侵すことの出来ない空氣が彼の周圍をぐる／＼と取巻いてゐた。」と山本有三氏も書いてゐるが、さうした劇以上の、風格、型破りの神韻を發散してゐるのが澤田でこれが彼一人の力で當時の歌舞伎劇をも壓倒する人氣を捉へた原因であらふ。

悪く言へば感傷的英雄主義だが、ある種の大きい人間といふものは尻尾も幾つかぶら下つてゐるので早急に正體は判らぬと思ふ。自分の様な人間にも澤田には愛好を感じたから不思議である。

神戸の外國畫専門の映畫館の畫の二階席でこの人が小さい子供を連れて見物にきてゐるのに偶然隣り合せてひどく舞台外の澤田といふ人に親みを感じたことを思ひ出して書く氣になつたのである。當時銀幕ではまだメリイ・ピックホードといふ女優の人氣のあつた時であつた。澤田といふ人は縁なしの近眼鏡をかけてひどく大きな立派な顔をしてゐた。随分と昔のことである。

澤田正二郎の父は土佐藩士の出であつたこともその藝風と何か關係のあるやうで面白い。

(七)「幻の庭園」 掲載：昭和10年10～11月（推定）

【本文】

友藤田太郎が仕上げにかゝつてゐたのは五十號位の大きなものでP老理學博士の舊家にあたる鬱蒼と紅葉や松やの樹林の立ち籠めた秋の庭園風景であつた。博士は隨筆家としても一代に聞えてゐる人なのでこの人の隨筆を愛してゐる僕は藤田の眩しい様な例の見慣れた獨自な色彩の中に浮いてゐる泉石樹林の布置にひどく興味を覺えた。それにこの舊宅には曾て僕の教を受けた某外人が住んでゐたこともあり××館と言ふ外人の姓名を冠した名もある位であの温厚な牧師の様な背の高い鷺鼻の教授が私宅ではかなり名を博したそれ者だつたと云ふことも初耳であつた。この繪をみながら自分は死んだ好人物の語學教授のあの鼻聲やつつかい棒をした古い學校の二階の教室を想ひ出した。かういふ狭い市では行き合ふものが皆因果律の鉢合せなのだ。／＼

藤田の入念な仕事の結果は悪からう道理はなく××展でも呼物の一つとして迎へられてゐると聽いて僕は瀕死の病氣から漸く恢復して繪にやうやく油の乗つた彼のためにP老博士の古い庭園のためにも獨り欣んでゐた。その後幾月か経つて町の書店で、ある隨筆の雑誌を捲つてゐると、庭園の憶出とかいふ題の博士の文章にゆきあたつて奇異を感じた。まぎれもなく藤田の描いた油繪の故園の苑についてであり見慣れた彼のその繪が薄ぼんやりとした寫眞版になつて文章のなかに泛いてゐた。博士の文章は非常に似ず吟嘆的な調子で××展の一隅で出會つた藤田といふ未知の故郷の若い畫家の手になつた幻の庭園の追懷を細々と書いてあつた―何十年と離れてゐる庭で自分の記憶してゐるものと調子も色も異つてはゐるがその畫面に布置されてゐる事物は明かに皆自分の庭のものでその石燈籠のそばの紅葉の樹あたりを亡い母上がよく好まれて歩いたとか／＼あの泉石にはよく石龜があがつて甲羅を乾してゐたものとか、確かなことは忘れたが日頃のあのX線のやうに透きとほつた博士の文章とは亦違つた穏やかな寂しい文章だつた。藤田のあの豊麗な繪が薄ぼんやりと文中に挿まれてゐるのかもかへつて好ましかつた。僕は××展の人混のなかで前屈みに彼の繪に見入つてゐる老理學博士の鶴のやうに寂しい清軀を想ひ、その時の感懷を考へてみた。

故園の泉石樹々にかういふところであつた、りその幻を偲んだ博士は現實の故苑を訪うたよりもつと幸福であつたにちがひない。何故なら博士は物理學者である

よりも精神の幻像に仕へる藝術家であるから―それに、藤田の、秋の庭園の圖の雄麗はたしかに博士の老眼を拭ふに足り、不動の幻の庭の光彩を永く放つものだ。その繪はいま東京の博士の家にざられて追憶の時間を靜かに淨めてゐるはずだ。

(十二)「詩人小島貞一」 掲載：昭和10年10～11月（推定）

【本文】

詩人小島貞一氏は金澤市に住んでゐる。文人室生犀星の令甥であるが、犀星よりも一つ年上である。自分は昔から金澤を敢て出でない此人の持つ獨特な俳趣を帯びた詩の風格や其超然とした人間味にひかされて若干のお交際を願つてゐる。あへて云ふなら犀星よりも此人が人間として好きである。如何にも土地の郵便局に勤められてゐると聽いてゐる。課長か何かだ。

芥川龍之介の書いたものなどみると、金澤に鏝甚といふのがあつて芥川や犀星などよく飲みにいつたことがあるとか―震災後のことであらふ。小島さんは詩作何十年の間に一冊の詩集も出さず、昭和六年の十二月に初めて「初餐四十四」といふ縷玉のやうな詩集を出してゐる。

「であれ、世の人々、米鹽譽達を思ふに何んたる機敏なることよ。詩才を享くる者また多く三十を出でて詩心を放棄す。幸なるかな。／＼われ不惑におよんでなほ詩魔に憑かれ、人生蹉跎の悲事多し。まことに初餐四十四、いまこの貧詩集を編み終れば、天地すでに玄冬、白山大日連峯の峨々たる雪光、わが髮膚に徹して刺すものあり。この迂愚、大衆よ更に罵れ。われはたゞこの享けたる貧しき詩魂をかき抱きこの終生を古郷山川の草木と埋れ朽かな。」と、戴いた詩集の後記の一節にあつた。四十四にして漸く一冊の詩集を出したこの先人の自重さに聊かうたれるものを感じた。之からみて世間の山なす詩集は問題とならない筈である。「その頃室生犀星君は既に詩名を謳はれてゐたが生活的には最も落魄時代で都會と古郷との間をぬれ羽鳥のやうに去來してゐた。當時のその放縱なるチグリス的生活内容は偏狹な自分には詩人としての境涯を疑はしめ、室生君また俗吏根生として我を卑下した。當時若し其分水嶺を超ゆる氣魄と野心が我にあつたなら多少名をなしてゐたのであらう」と嘆じてゐる／＼が當の犀星が詩集の跋に「小島貞一君は鳥刺がうまい、鮎網を打つことが上手である。その外植木にも詳しい智識を持つてゐる。それよりもつと小鳥の事では驚く程細かい智慧を持つてゐる。鐵砲もうつ。」と書いてゐるか

石狩野の江別町のフキリツツを愛する若い詩人小田君から贈られたコタン雀——
こいつ丈は流石羽があると見て確に飛んできた。コタンはコタン、コル、クル（アイヌ酋長）などといふアイヌ語の部落だ。「アイヌも可愛想でもうこつちには純粹なのはゐないですよ。膽振の白老アイヌ部落なんかが型ばかりのものでせう」と書いてあつた。それにしてもこの胡桃細工のコタン雀だけは本場のアイヌから購めて来たんだから御安心なさいとある。同じコタン人形だつても内地人がどしどしこさへるのつまらないのである。

人間といふものの感性は不思議／＼なもので蝦夷の奥地に追はれた原始アイヌが暗い濕潤な落葉樹林から拾つて来た胡桃で無器用な手つきして（尤も愛奴の彫はうまいものだ）こさへたと思ふと、このぶなの樹のしたでもきよとんと懷手をして風に吹かれて立つてゐる移民の小倅のやうなむきつけなコタン雀はかなしい程な愛嬌をもつて頭かしげて串の肢で立つてゐるのだ。

恰度冬だつたし自分は吹雪の落葉樹林をちりぢりに吹かれて散つてゆく寒雀の一羽を机の上に置いてその動かうとしない疲れのあとをみた。阿寒の山に吹きあがる朱泥のいろや、毒のために鼻のかけたコタンコルクルや内地人の子を孕んだその娘らの生活を——コタン雀のどこかにその吹雪の闇があり被征服民族の哀求の律が神韻とたたへてゐるやうに思つた。

コタン雀は今、藤棚のある畫家のうちの黒檀の机の上に中秋の光を受けて立つてゐるはずだ。こんなのが貰ふ身にもやる身にもなつてうれしい贈物である。

（六）「芥川龍之介の詩」 掲載：昭和10年10—11月（推定）

【挿し絵】

AWARE AWARE TABITOWA ITUKAWA KOKORO YASURAWAN

【本文】

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこゝろやすらはん
垣根を見れば『山吹や

笠にさすべき枝のなり」

彼の旅行記、東北、北海道、新潟は改造社として入用であつた。しかし彼は、彼自身は、すでに大正十一年五月の作であるこの、あはれ、あはれ、旅とは、を差し挟みたいので旅行記が一つ必要であつたことにちがひない。

東北、北海道、新潟の講演旅行では一挺のぴすとるが彼の手にいつてゐる。「僕はこんどはいよいよびすとるも手にいれた」これが彼のこゝろである。

——昭和二年九月の文藝春秋の芥川追悼號をめくると彼の畏友畫人小穴隆一が書いた一節である。

僕は芥川の残した詩では（日光）とか（陶器の亭）とかいふ文人趣味のものよりこの古めかしい装の詩／＼が一番彼の最後の人間が出てゐるので好きである。「山吹や笠にさすべき枝のなり」は芭蕉だが、三界虚妄の堂々巡りは遂に芭蕉の旅笠にさすべき山吹の實のない花をみつてゐるから面白い。芭蕉と芥川とひどく食ひちがつてゐるやうに思ふのは生活の表面上の映像から来る幻で、たゞ芥川は酔へない芭蕉であつたにすぎないことは、あの近代人として眺めた芭蕉批評の微を盡した芭蕉雜記をみても判る。

——芭蕉は大事の俳諧さへ「生涯の道の草」といつたさうである。すると七部集の監修をするのも「空」と考へはしなかつたであらうか？同時にまた集を著はすのさへ、實は悪と考へる前に「空」と考へはしなかつたであらうか？芭蕉もやはり寒山の木の葉に書いた詩のやうに一千余句の俳諧は流轉／＼に任せたのではなかつたであらうか？少くとも芭蕉の心の奥にはいつもさう云ふ心もちの潜んでゐたのではなかつたであらうか？（芥川）

ところが彼は自殺直前の遺稿（十本の針）に鴉と孔雀と題して「わたし達にも最も恐ろしい事實は私たちの畢にわたし達を超えられないと云ふことである。凡ゆる樂天主義的な目隠しをとつてしまへば、鴉は何時になつても孔雀になることは出来ない。或詩人の書いた一行の詩は何時も彼の詩の全部である。」と書いてゐる。

この超克の不安を死の詩をもつて乗り切つたのが芥川の裡にある近代人の芭蕉で、古い時代の芭蕉の裡なる芥川は生涯を詩魔の翻弄の太虚に疲れしめてこの不安を消したのに過ぎないと僕は思ふのである。

命なりわづかの笠の下涼み 芭蕉

ねむるともなし秋の蝶

萩のゆふべに ひそむのみ

◇

雨がががつて夕ぢかくなると流石、野のなかの一つ家は肌ざむく秋を覚える。前庭の露の光るくま笹、萩など見るともなくみてみると、古めかしい琴歌めいたものが唇にのぼつたので書きつけてみた。さうだ、如何にも翅の破れた秋の蝶のやうに古めかしいものだ。ある見知りこしの女性が「あなたのこの頃の詩はとても難しくつて妾たちに解らないが、何故もつと解りよくつて歌へるやうなのを書かない？」といったことがある。つまりその女性の云ふのがほんととも知れないので黙つて聞いたことだ。呉越同舟の浮世だ。何／＼より理窟は禁物だ。

ところで、僕にはその歌へるうたといふのが元祿の松の葉集からでもひきずりだしたやうな今様調なんだが——「そんなのはもう古いわよ。もつと艶めいてもつと近代的なのはない——東海林太郎が歌ふやうなの——」と、俄然この歌は今時の最も古い琴三味線女史からも剣突くを喰ふにちがいないと思つてゐる。ジャズ、ジャズジャズ、ジャズ小唄なるかな。猫も三味線も女工も詩人も音楽家も畫家も工夫も政治家も——そこの鼻たれ小僧までゆふべおぼえた銀幕の甘つたるい伴奏小唄だ。ジャズ日本萬歳！

◇

僕は流行りさうにもない今様の古い歌をつづらに仕舞ひこんで呉越同舟の耳の潰れさうな喧ましい時代の乗合船から、葦の枯穂の戦く古典日本の沁々とした秋の風景のなかに獨り降りる。

へ秋の夜は、長いものとはまんな、月見ぬ人の心かも、更けて待てども來ぬ人の、音づるものは鐘ばかり、かぞふる指の寝つきつ、わしや照られてゐる／＼のわいな。

歌澤の名詩（秋の夜）は嘘か真か知らないが佐渡に流謫された江戸者が、大江戸のひとを偲んでの述懐と聴いた。さう思へばとても小唄小唄藝者風情の爪弾にかゝるには勿體ない文句の仄々と身にせまるのを覺ゆる。佐渡ならぬ浮世金山地獄の階子で迷ふた小春治兵衛もどきの情痴のはての歌にしてもだ——。

◇

紅衣落ち盡して暗香残る
葉上の秋光 白露寒し

越女情を含んで已に限り無し
長袖をして欄干に倚らしむる莫れ

定めし（秋の夜）の歌情に泛ぶひとは羊士諤の七言絶句の越女に和魂を添へたやうな主にちがいない。縮綿のうちに清々とした月光を感じるやうな江戸歌の女主人公である。へ秋の夜、の本調子の冴へた音メらしいものには不幸にして接せぬが、暗くなる前庭の萩をすでに□してゐる虫の聲は仄々として待てども來るはずのないものを想ふには充分である。

（二）「コタン雀」 掲載：昭和10年10月24日

【挿し絵】

鈴蘭を粉にしておくる思ひかな

【本文】

仇事ならぬものを貰ふ身になると珍品ならずともうれしい。（紙のふすま、麻の衣、一鉢のまうけ、あかざのあつもの、いくばくか人のつひえをなさむ。——徒然草）扉おちて月常住の燈を掲げる余らに廻りあはせるのは腰の脱けた瓢か、精々で欠けた今戸焼の狸位のもので珍品事件など起りやうもないがそれが厘毛の備はらぬ身にとつては事の外たらつてうれしいものだ。その贈物がまた、遠くの邦の花や土民玩具とかいふものであつて見れば聊か時代離れのした浪漫的人情に再會した様で餓鬼が盂蘭盆に逢つた氣持ちで中々にうれしいものだ。

詩の交際といふものは得手してさういふのが多く、何時か臺灣の詩人から茉莉花といふ薫はしい花を「色にでも嗅ぎなさい」とわざ／＼小包で贈ってくれたが、こちらで飛立つ様に開けた時には生薔／＼の古い布子ほどの色も香もなく思ひはずでにとほく萎なびてゐた。氣持ちだけで有難く頂いたのに狩勝峠の鈴蘭があり、こいつは念が入つて粉々になつてゐた。

鈴蘭を粉にしておくる思ひかな

×

×

たちが多く集った「日本詩壇」を介した全国的な詩人ネットワークの形成を窺わせる内容となっている。「日本詩壇」が誌面を通じて不可視の〈詩壇〉ではなく、詩人たちの全国的なネットワーク創出を目論んでいたことについては稿を改めて考えてみたい。

(六)「芥川龍之介の詩」では、芥川と芭蕉を比較することにより、近代人としての理性が「詩魔の翻弄」に勝った芥川を「酔へない芭蕉」と評し、(七)「幻の庭園」では、随筆「庭の追憶」(心境)(昭和9年6月)にて旧邸の庭園を描いた一幅の絵から、生前の妻や父母等の姿を追想した寺田寅彦を物理学者ではなく「精神の幻像に仕へる芸術家」と評している。その鋭利な批評眼によって文学を裁断していることも興味深い。同じく(七)では、「庭の追憶」に描かれている寅彦と画家・藤田太郎との関わりについて、藤田側の視点に立って描写しており、より立体的に寅彦の随筆を読む一助となる。

上記の理由から、本稿にて「随筆 楚歌春秋」を翻刻し、そのテキスト化を行った。

二、「随筆 楚歌春秋」翻刻(抄出)

〈体裁について〉

「随筆 楚歌春秋」は、「岡本彌太(作)／藤田太郎(画)」というクレジットと共に、藤田の挿し絵を上段に、彌太の随想を下段に配し、一行十五字、一段二十二～二十九行の二段／四段で構成されている。

なお、各掲載日については、(一)「秋夕夢」の昭和10年10月23日、(二)「コタン雀」の昭和10年10月24日は複写資料のメモによって確認することができるが、(三)「阿房陀羅經」以降は欄外の日付やメモが残されておらず、原本の「高知新聞」も確認ができないため、掲載日を確定することができない。そのため、掲載日は、明確な日付が判明している(一)、(二)回のみ記載し、各日連載であることを考慮して、(三)「阿房陀羅經」以降の掲載分は「昭和10年10～11月(推定)」とした。

〈表記について〉

確認した「随筆 楚歌春秋」の記載内容をルビや用字も含めてそのまま翻刻することを原則とした。藤田太郎による挿し絵に文字情報を書き込まれている場合は、そちらも翻刻を行った。表記については、以下の【凡例】に従った。

【凡例】

- ①挿し絵の文字情報の翻刻は【挿し絵】、本文の翻刻は【本文】と示す。
- ②漢字は、旧字体のものも含めて、可能な限り記載の通りの表記とする。
- ③仮名遣い、送り仮名、拗音、促音の表記は記載の通りとする。
- ④おどり字は、記載の通りとする。
- ⑤ルビ、傍線、傍点は記載の通りとする。
- ⑥誤植と考えられる箇所は、右に「ママ」を付す。
- ⑦資料の状態により、判読困難な文字は□で示す。
- ⑧新聞の段が変わる箇所には「／／」を挿入する。

(一)「秋夕夢」掲載：昭和10年10月23日

【挿し絵】

秋の夜は

長いものとは

まんまるな

月見ぬ人の心かも

更けて待てども

来ぬ人の

音づるものは鐘ばかり

かぞふる指の寝つきつ

わしや照されて

ゐるわいな

【本文】

假住みに

あふる、萩の はぎ ふかさかな

白つゆさそふ あだ花の

さらに艶なき

きのふ けふ

できる。そこでは「カントでさへ簡素な食卓の適量の酒は飲んでゐる」と、昭和14年に米穀が配給制となり、酒造の質規制が設けられざるを得なくなった時局下の状況に対して批判的な眼差しを向けている。

こうした視野の広い批評眼が評価されてか、滝川富士夫の詩集『夜道』（昭和8年1月、聖草詩社）の「序」、間野捷魯^{（注3）}の詩集『体温』（昭和8年9月、日本書房）の「跋」、住江明の詩集『夜に詠める歌』（昭和16年8月、黒潮詩会出版部）の「序詩」等の「日本詩壇」関連の詩人たちははじめとして、島崎曙海の詩集『宜撫官詩集地貌』（昭和14年10月、二〇三高地詩社）の「詩集地貌の序」、川島豊敏の詩集『北堡壘』（昭和15年11月、二〇三高地詩社）の「北堡壘の序」等の「二〇三高地」に集った満洲の詩人たちの求めに応じて、詩集に序や跋を数多く寄せている。

詩篇だけではなく散文も精力的に書き残した彌太の手による随筆に、「高知新聞」の昭和10年10月23日から15回に亘って連載された「随筆 楚歌春秋^{（注4）}」がある。『香我美町史 下巻』（平成5年1月、香我美町）「第11章 人物」の画家藤田太郎^{（注5）}の項目には「さらに同十月（稿者注・昭和10年）から岡本彌太の随筆「楚歌春秋」の挿絵を同紙に一五回発表」という記述を確認することができ、「岡本彌太詩集——山河篇——」（平成10年1月、泰樹社）所収の山川久三編「岡本彌太年譜^{（注6）}」の昭和10年の項にも「十月二十三日より、高知新聞に随筆「楚歌春秋」を、藤田太郎の挿し絵で十五回連載」という文言が見られる。

かかる記述により、彌太の「楚歌春秋」という随筆の存在はかねてより知られていながらも、長らくその内容を確認・参照することが困難となっていた。^{（注7）}しかし、高知県の詩人猪野睦氏が旧蔵していた「高知新聞」の切り抜きの複写資料にて「随筆 楚歌春秋」の全十五回を確認することができ、猪野家遺族、岡本家遺族の了解の下、資料調査、翻刻・注を施す作業を行った。それにより、後年、詩誌「詩道」（昭和12年3月、同年7月）に発表された同一題の「楚歌春秋——わが詩生活の譜——」とは、その内容と性質とが大きく異なるということを確認できた。

「高知新聞」紙上に連載された「随筆 楚歌春秋」各回の題は以下の通りである。

（一）「秋夕夢」、（二）「コタン雀」、（三）「阿房陀羅經」、（四）「虫二題」、（五）「誘蛾燈一夜大盡^{（注8）}」、（六）「芥川龍之介の詩」、（七）「幻の庭園」、（八）「読書」、（九）「菊を作る人」、（十）「昔の新聞」、（十一）「詩人小島貞一」、（十二）「鯉」、（十三）「思案草漫談^{（注9）}」、（十四）「澤田正二郎の追憶」、（十五）「茶の湯」。

このうち、本稿では、（一）「秋夕夢」、（二）「コタン雀」、（六）「芥川龍之介の詩」、（七）「幻の庭園」、（十一）「詩人小島貞一」、（十四）「澤田正二郎の追憶」の文学や絵画、演劇に関わる掲載回を抄出し、翻刻を行い、必要に応じて注を施した。

さて、本稿で翻刻を行う「随筆 楚歌春秋」により、最も精力的に創作に取り組んでいた詩集『瀧』から未刊詩集『山河』編集に至る間の彌太が、同時代の文学、文化、流行、社会等をいかなる観点から捉え、批評していたのかについて窺い知ることができ、「詩道」に掲載された「楚歌春秋」が編年体で紡がれた経系のような性質を持つことに対して、「高知新聞」に掲載された「随筆 楚歌春秋」は同時代を眼差した緯系の役割を果たしている。拙稿^{（注10）}でも触れたように、昭和23年には、詩誌「山河」刊行に伴う浜田知章や島崎曙海等による彌太顕彰のうごきと連動して、出身地での詩碑建立、『岡本彌太選集』（昭和23年1月、岡本彌太選集刊行会）の刊行があった。そこでは、第一詩集『瀧』の詩篇を軸とした「青きあられの高士」（島崎曙海「岡本彌太論」（『山河』昭和23年4月））という、時局に対する批判意識を持つ詩人ではなく、人生派の詩人としてのイメージの確立が試みられた。

しかし、岡本彌太顕彰事業で中心に添えられた詩集『瀧』以降に彌太の創作は本格化している。そのため、今回翻刻を行った「随筆 楚歌春秋」は、これまで殆ど扱われて来なかった詩集『瀧』以降の彌太の創作をより立体的に捉えるための材料になると考えられる。

（一）「秋夕夢」は、昭和10年以降の「琴歌」と呼ばれる詩群を読み解くための補助となる。「随筆 楚歌春秋」の翌月に発行された「日本詩壇」（昭和10年11月）には、「琴歌四首」のうちの一篇として「秋夕夢」が掲載されており、以降続くこととなる「琴歌」の第一歩を「随筆 楚歌春秋」から出発している点は看過できない。

（二）「コタン雀」は、同時期の「日本詩壇」に掲載された彌太の詩篇や随筆などの叙述を解釈し、評価する上で重要な資料となる。同一題かつ同一テーマで執筆された随筆「コタン雀」が「日本詩壇」（昭和10年3月）に先行掲載されている。メディアと掲載時期の違いにより、二つの「コタン雀」の批判の矛先が変化することについては既に論じた。^{（注11）}

また、（二）「コタン雀」に登場する北海道の詩人小田邦雄や（十一）「詩人小島貞一」に登場する石川県の詩人小島貞一との交流に、同時代の地方に在住する詩人たちとの地域を超えた広範な交流・連帯の様相を垣間見ることができる。地方詩人

地方から見た近代の一側面——岡本彌太「隨筆 楚歌春秋」翻刻（抄出）

佐藤 元紀

千葉大学・教育学部

One Aspect of Modernity From a Regional Perspective : Excerpt and Reprint of Yata Okamoto's Essay "Soka Shunju"

SATO Motoki

Faculty of Education, Chiba University, Japan

昭和10年10月23日から「高知新聞」紙上にて十五回連載された岡本彌太による「隨筆 楚歌春秋」は、彌太の年譜等を介してその存在が知られていた。しかし、当時の「高知新聞」が閲覧困難となっていたため、長らくその内容が確認できない状況が続いた。彌太の文学的営為を留める資料を収集、調査する段階で、高知県出身の詩人で戦後に「日本未来派」等で活躍した猪野睦氏が旧蔵していた複写物にて同資料を確認することができ、猪野家・岡本家遺族の承諾を得た上で、翻刻を行い、注を施した。同時代の文学、文化、流行、社会等の状況を捉えて批評する「隨筆 楚歌春秋」は、これまで扱われる機会が少なかった第一詩集『瀧』（昭和7年10月、詩原始社）以降に本格化する彌太の創作を捉える上での基礎資料になると考えられる。また、地方にいたからこそ近代という時代をより客観的に、より批判的に捉えることができた彌太の眼差しをそこに看取することができる。

キーワード……日本近代文学 (Japanese Modern Literature) ・地方 (Regional) ・岡本彌太 (OKAMOTO Yata) ・「高知新聞」 (The Kochi Shinbun)

一、岡本彌太「隨筆 楚歌春秋」の射程

昭和初期に「詩神」、「日本詩壇」等の詩誌で活躍した高知県出身の詩人に岡本彌太^{〔注1〕}がいる。その文学的営為を留めるテキストとしては、第一詩集『瀧』（昭和7年10月、詩原始社）、未刊に終わった第二詩集『山河』（昭和11年春刊行予定となっていた）に収められる予定であった詩篇、昭和10年頃から紡ぎ始められた「琴歌」という一群の文語定型の小曲を挙げることができる。詩集『瀧』以降に主たる発表媒体となった「日本詩壇」の創刊（昭和8年4月）以降は、詩篇のみならず、詩論、評論、時評、隨筆等も彌太は数多く手掛けるようになる。

また、「日本詩壇」以外でも、「麵麴」（昭和9年3月）では久慈徹三の詩集『肋』

に対する批評を発表し、「動脈」（昭和10年4月）では彌太が傾倒していた高橋元吉に関する「高橋元吉論」を発表している。特筆すべき点としては、「隨想 宮澤賢治」（「榕樹林」昭和8年11月）、「宮澤賢治」へのノート（『宮澤賢治追悼』昭和9年1月、次郎社）、「春と修羅の我が思い出」（「イーハトーヴォ」昭和14年11月）等、宮澤賢治の初期読者として書き残した一連の批評を挙げることができる。^{〔注2〕}

彌太による批評のなかでも異色なものとしては、新居格や萩原朔太郎、佐藤惣之助、福田正夫、吉井勇、百田宗治らと共に雑誌の求めに応じて執筆した「酒・味噌・醤油に関する最近の御感想」（「日本醸造協会雑誌」昭和14年9月）を挙げることが

連絡先著者：佐藤元紀 m.sato@chiba-u.jp